武井武雄の『童画』制作の意義について

柄澤初音
地域キュレーションコース
芸術史

はじめに

武井武雄(1894～1983)は、それまで文学の付随物という認識しかなされていなかった「子どものための絵」に初めて「童画」という名前をつけ、芸術のひとつとして確立させた人物である。「子どもの心に触れる絵」を目指し、レトロとモダンの共存を感じさせるような独特の世界観と、世代を越えて伝わるユーモアを持ち合わせている。また、素材や媒体にとらわれない柔軟さも特徴である。

本論文では、武井が「童画」という言葉にどのような思いを込めたのか、武井の「童画」は具体的にどのような要素を持っているのかを検討する。

第一章　武井武雄の創作活動と「童画」の定義

当時武井が「童画」という言葉に込めた思いと、現在の「童画」の定義にはズレが生じている。

現在では一般的に「子どものために描かれた絵画の総称」(引用1)と定義されているが、武井や童画に関する先行研究や武井自身の言説などから、武井自身は「子どものために描かれていること」かつ、「芸術的に自立していること」が童画と呼べる条件であると考えていたことが明らかとなった。

第二章　童画家 武井武雄

武井は学生時代、油画の画家になることを志していたため、当初は子どものための雑誌の画家として評価されることに戸惑いを感じていた。このような心境の変化とともに、作風にも変化が見られた。絵雑誌『コドモノクニ』(東京社、1922～1944)における武井の作品は、背景の抽象化や擬人化、鮮やかな色調などを駆使し、一目で子どもたちの心に印象付けるような描き方へ変化を遂げている。1人の所有物になる絵画よりも、たくさんの人の目に触れる出版の世界で、楽しみややりがいを得るようになったようだ。

しかし、武井は戦後に再びタブロー画の制作に取り組むようになる。《青の魔法》(1964年、図1)は、練られた構図と、鮮やかな色彩で子どもの心に強烈な印象を残し、武井のタブロー画の代表作と言われている。《青の魔法》に添えられた詩には、「灰色」や「見限って」など、鑑賞者を一瞬ドキッとさせるような言葉が登場する。

武井は単純な美しいもの、綺麗なものだけを子どもたちに見せるのではなく、美しい世界の中にもリアリティを感じさせる描写を得意としていたようだ。また、パウル・クレーの、輪郭のない面やテクスチャーの面白さを追求するようなシュルレアリスム的表現に影響を受け、タブロー画で表現しようとした。

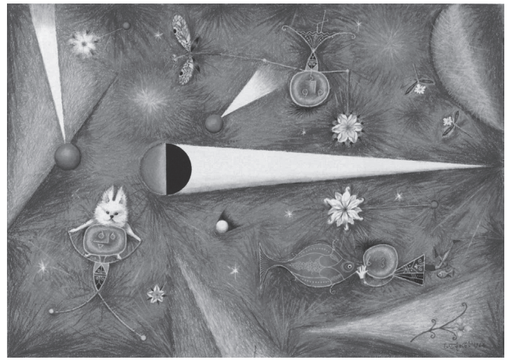

図1《青の魔法》武井武雄／1964年
湯川公宏編、イルフ童画館監修『別冊太陽 日本のこころ216 武井武雄の本 童画と グラフィックの王様』株式会社平凡社、2014年

第三章　童画の展開

長野県岡谷市は武井の生み出した童画文化が最も色濃く残っている場所である。武井の故郷である岡谷市では、「童画のまち岡谷」として、童画や武井武雄の作品を市内の至る場所でモチーフとして活用する取り組みが行われている。これは岡谷市役所とイルフ童画館との連携の上で行われており、童画を現代に残していくためであると同時に、岡谷市民にとって童画が身近な存在になるようにという願いが込められている。また、岡谷市は武井武雄についての研究機関として日本童画美術館(イルフ童画館)を設置し、武井作品や童画作品の収集展示を行っている。「子どもたちに質の高い芸術を与える」という、武井の大切にしていた考えを受け継いで行こうとする活動が行われている。

おわりに

武井の童画に限らず、画家が本気で制作した作品は、例え子どもの時に出会ったとしても、 大人になってふと思い出して懐かしむことができるような力を持っている。それこそが、武井が「童画の目指すべきところ」だと述べている「人的感応」である。「童画」という言葉自体が現代に残っていなくとも、子どもに質の良い芸術を与えるため、制作に真摯に向き合う作家たちの存在や、「子どものための絵の価値」を世間に印象付けたことが、武井が「童画」という言葉を生み出したことの意義である。

[引用、主要参考文献、URL]
引用1)大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』大日本図書株式会社、1993年、437頁
参考1)遠藤知恵子「武井武雄の創作活動と『童画』の成立」白百合女子大学大学院博士論文、2015年
参考2)イルフ童画館ホームページ
http://www.ilf.jp 2022年1月14日最終閲覧

大地の芸術祭における「協働」と地域の持続可能性の関係

《ポチョムキン》と倉俣集落を事例に

長津晴菜
地域キュレーションコース
アートマネジメント

研究対象・背景

新潟県越後妻有地域（十日町市・津南町）で2000年から開催されている現代アートの国際展「大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ（以下、大地の芸術祭）」を対象に、そこでの運営の中心を担う「協働」の取り組みについて、これまでの変遷と現状、そして今後のあり方を明らかにしていく。

大地の芸術祭で発表される作品のほとんどは、地域文化に根差したサイトスペシフィックな性質を持ち、その制作・運営には作家や住民、芸術祭スタッフ、行政、サポーターといった多様な主体が関わる。その一連の活動には「協働」という言葉が開催当初から一貫して使われ、大地の芸術祭は地域を活性化する取り組みとして、世界的に注目を集めている。しかし、大地の芸術祭における「協働」には明確な定義が無い上に、芸術祭を代表する作品の1つであるカサグランデ&リンターラ建築事務所による《ポチョムキン》（2003、図版）と集落の間では、地域が活性化された痕跡はなく、そこでの活動が「協働」と言える段階まで達していないことが明らかになってきた。本研究では、「協働」の取り組みが芸術祭や地域にもたらす可能性について、長期的なフィールドワークにより考察を進める。

研究目的・調査方法

本研究においては、大地の芸術祭における「協働」の変遷とそのあり方を明らかにしていくことを目的に、次の3つの視点から調査を実施した。

①「協働」とは何か　【第1・4章】
　文献調査と定義の仮定、「協働」の主体に対するヒアリング
②《ポチョムキン》における「協働」　【第2・3章】
　作品維持活動への参画、住民対象アンケート及びヒアリング
③「協働」と持続可能性の関係　【第1・2・3・4章】
　上記の調査を踏まえた「協働」の変遷と効果、課題の考察

カサグランデ&リンターラ建築事務所《ポチョムキン》（2003）および倉俣集落
新潟県十日町市　筆者撮影

ポチョムキン

《ポチョムキン》は、2003年に完成の十日町市倉俣にある大地の芸術祭の屋外作品である。作品はコールテン鋼の壁で全体を覆い隠す構造をもち、内部には白砂利が敷かれた空間が広がっている。所々にはかつての林の木々が残され四季折々の風景を見せるほか、廃材を用いたブランコや東屋が配置されており、大地の芸術祭を代表する作品である。ここでは、《ポチョムキン》に関連するさまざまな調査を行った。

これらの調査は、《ポチョムキン》がどの程度地域に浸透しているのか、また、作品の制作や維持管理の段階で、どのような住民の関わり方があったのかを明らかにした。《ポチョムキン》では、第5回展（2012）以降は住民が積極的に作品に関わる機会が少なく、作品に対する関心や愛着の低さが「協働」の発展を妨げている可能性が浮上した。しかし、集落には継続的に作品に関わる者や、作品に対して好印象を持つ者が一定数存在し、今後《ポチョムキン》において「協働」の取り組みが集落内で発展する兆しが示唆された。

「協働」の性質と現状

調査を踏まえ、大地の芸術祭における「協働」を、本研究では「越後妻有地域の実情を都度考慮しながら、作品を取り巻く多様な人々によって大地の芸術祭を実行する主体的な活動全般とその過程」と仮定した。

「協働」は大地の芸術祭総合ディレクターである北川フラムにとっても重要な意味を持ち、地域や運営上の困難は「協働」によって乗り越えてきたと言える。しかしながら、その内容は時代や場所、語る人によって様々であることに加え、全ての作品で「協働」が成立しているとは限らない。ただし、本研究において、「協働」に関する内容には他者同士が関わっていくことや、継続的な活動であること、自らの力を主体的な形で動員すること、関わる地域やジャンルを拡大させること、といった要素が共通項として明らかとなった。そして、これらは「協働」を定義し、それぞれの活動を推進していく上で重要な指標となる。

結論

本研究における調査によって、大地の芸術祭の中心を担う「協働」の取り組みに関する多様な認識が明らかとなった。現段階で全ての作品において「協働」が見られるとは言い難いが、成熟段階にある「協働」は地域のみならず芸術祭に対しても持続可能性をもたらす。

［主要参考文献］
北川フラム『大地の芸術祭　＜ディレクターズ・カット＞』角川学芸出版、2010
大地の芸術祭・花の道実行委員会東京事務局編『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2003』現代企画室、2004

国内の芸術祭における教育プログラムの現状と課題・展望

早川綾音
芸術文化キュレーションコース
アートマネジメント

はじめに

近年、アートプロジェクトと呼ばれる活動が日本各地で展開されている。その動きの中でも顕著なのが芸術祭の開催である。芸術祭はこれまで、主に地域振興やコミュニティ形成の効果において注目を集めてきた。しかし、アートファンのみならず幅広い人を巻き込む性質や、美術館の無い地域でも豊かな鑑賞体験を提供できる事から、教育の場としての可能性も大きいと考えられる。本論文では、国内芸術祭における教育プログラムの実態を調査し、その可能性を展望することを目的とする。

研究方法として、国内芸術祭の運営者を対象とした教育プログラムに関するアンケート調査、及び大地の芸術祭とあいちトリエンナーレを事例としたヒアリング調査を実施した。

1. 芸術祭について

日本で開催されている芸術祭は、地域の活性化や地域振興が主要な開催目的とされる点において、日本独自の特徴を持つ。また、芸術祭は「都市型芸術祭」や「地域型芸術祭」といったように、その開催地ごとの分類で論じられることが多い。都市型芸術祭は、美術館を舞台として開催される場合が多く、都市間競争や地域振興、芸術文化の振興等の目的で開催される。一方、地域型芸術祭は、里山や離島などの地方を舞台とし、地域振興を主要な目的として実施される。アーティストや地域住民との協働が多く行われる事も特徴の一つである。

2. 芸術祭の教育プログラムに関するアンケート調査

国内芸術祭の運営者を対象とした教育プログラムに関するアンケート調査を行い、実施状況や運営者の意識を把握した。

調査の結果、対象芸術祭の約8割が教育プログラムを実施していることが確認された。また、芸術祭が主に地域振興を開催目的として行われるのに対し、教育プログラムはアートへの理解や芸術文化の浸透を目的として実施されることが明らかとなった。教育プログラムの抱える課題としては、教育プログラムを中心的に担う人材の不足や学校連携の方法の確立が困難であること、また、鑑賞教育や美術教育などの具体的な学びの場としての目的意識が薄いことなどが挙げられた。

アンケート結果の分析では、教育プログラムの実施有無に関わらず、芸術祭自体が芸術文化の理解の促進やコミュニティ形成に寄与するが、教育プログラムを実施することで、より多様な学びが得られることが確認された。また、人材育成の場として機能する可能性が導き出された。さらに、都市型芸術祭と地域型芸術祭においては、それぞれの型によって教育プログラムの傾向の違いがみられることが明らかとなった。

3. 芸術祭関係者へのヒアリング調査

大地の芸術祭へのヒアリング調査では、教育プログラムの枠が定まっておらず、運営者側での教育的な取り組みについての共通認識が特に持たれていないことが確認された。また、芸術祭の継続力と地域の「他人を受け入れる」という受容力によりアートへの理解が育まれてきた。大地の芸術祭が持つ特有の力が、鑑賞のルールの共有や、地域の芸術文化の地盤形成に寄与したといえる。今回の調査により、「プログラム」としての枠組みがなされていない教育プログラムの存在が明らかとなった。

あいちトリエンナーレへのヒアリング調査では、教育プログラムとしての枠組みが確立されており、教育プログラムに対する意識が芸術祭全体で共有されていることが確認された。2019年の教育プログラムでは、対話型鑑賞を基にしたボランティア育成やガイドツアーが実施されたことで、多くの人々に鑑賞方法を共有し、アートへの理解を醸成する機会を提供した。また、こうしたボランティア育成に運営者が意識的に取り組むことで、「やりがいの搾取」の問題解決に寄与する可能性を導き出した。しかし、このような特徴的な教育プログラムの実施には、あいちトリエンナーレがこれまで教育プログラムを重視して取り組んで来たことや、教育プログラムを担う人材が充実していたことが大きく関与している。教育プログラムに携わる人材の確保が、教育プログラムの充実や質の向上につながるといえる。

結論

本調査により、多くの芸術祭が教育プログラムを実施し、その必要性を認識している事が把握できた。また、教育プログラムの実施が、住民や来場者の現代アートや芸術文化への理解を育み、多様な学びの場を醸成することに寄与していることが明らかとなった。このことにより、芸術祭においてプログラムを実施することの意義が確認された。さらに、都市型芸術祭と地域型芸術祭において教育プログラムの在り方が異なる事が導き出され、より詳細な実態の把握が可能となった。　一方、教育プログラムを担う人材の不足や、鑑賞教育や美術教育の場としての認識の薄さ、教育プログラムの認識や在り方の曖昧さなどの問題が露呈した。今後の芸術祭の教育プログラムにおいては、単なるプログラムの実施にとどまらず、内容の充実や質の向上に、より意識的に取り組むことが求められるだろう。また、メソッドの共有や芸術祭ごとの特色を生かしたサイトスペシフィックな在り方、及び鑑賞教育や美術教育の場としての活用が展望される。地域において、より多くの人がアートと出会い触れ合う場となるために、芸術祭における教育プログラムが大きな役割を果たすことが期待される。

［主要参考文献］
野田邦弘「アーティストと地域は同じ夢を見るか－芸術祭と地域のイノベーション」『都市問題』109巻3号、後藤・安田記念東京都市研究所、2018

地域活性化にアートが選ばれる理由

奥能登国際芸術祭2017を事例に

浦田愛理
芸術文化キュレーションコース
アートマネジメント

はじめに

近年、人口の都市流出による過疎化や少子高齢化の影響により、地方の活気が失われてきている。そのような中、アートを用いた地域活性化の取り組みに注目が集まっているように思われる。

しかし、本来アートとは自分の創造力や技量を表現するための手段であり、社会問題を解決するためのものではなかったはずである。それにも関わらず、現代においては地域活性化の政策として違和感なく受け入れられているように思われる。

そこで、アートが選ばれることの理由を明らかにすることを、本研究の目的とした。

アートプロジェクトの定義

アートプロジェクトを定義していく上で、熊倉純子監修の『アートプロジェクト　芸術と共創する社会』で述べられている定義を参考にしたい。熊倉はアートプロジェクトの定義を次のように説明している(註1)。

1. 制作のプロセスを重視し、積極的に開示
2. プロジェクトが実施される場やその社会的状況に応じた活動を行う、社会的な文脈としてのサイト・スペシフィック
3. さまざまな波及効果を期待する、継続的な展開
4. さまざまな属性の人びとが関わるコラボレーションと、それを誘発するコミュニケーション
5. 芸術以外の社会分野への関心や働きかけ

このような先行研究による定義を踏まえ、本研究ではアートプロジェクトを、「美術館から飛び出し、活動が行われる『場』の社会や歴史に関わりながら、市民や社会に様々な影響を与える芸術活動」とし、規模を問わず芸術祭も含めてアートプロジェクトと定義する。

アートプロジェクトの効用

先行研究からは下記のことが考察された。アートプロジェクトは、時代や地域に合わせて規模や手段を変えていくことのできる柔軟性を持つため、場所や人を選ばず、幅広く行うことができるという利点がある。また、地域の価値を新たに創造できるという、様々な地域が抱える問題の突破口となる可能性を秘めている。さらに、住民の意識に語りかけることで町や人に変化をもたらし、協働の動きを作り出している。手間のかかることだからこそ、五感が刺激され、曖昧だからこそ、意味を明確にしようという人間を動かす力がある。

また、奥能登国際芸術祭の現地調査およびヒアリング調査からは、下記のことが見えてきた。芸術祭の経験から、これからの様々な事業に活用できる多くのヒントが得られ、地域にとって芸術祭が次につながる持続性を持つ事業となりえた。また、民間、行政の壁を越え、地域学の機会となり、人々の活動意欲を刺激し、活力を生んでいた。すなわち、アートは街が必要としている持続性を内包し、未来につなげる力が期待できることが明らかとなった。

地域活性化の定義

地域活性化の定義に関しては、『過疎地域再生の戦略』の著者である中藤康俊の考えにのっとった「地域再生」を手掛かりとした(註2)。地域活性化と同義で使われる言葉としては、「地方創生」と「地域再生」があるが、過疎、少子高齢化という社会問題を抱える現在の地方において、積極的な開発による「地方創生」ではなく、穏やかに変化をもたらす再生の方が現実的であり、受け入れられやすいと考えられる。そこで本論文では、地域活性化を、「新たなものを開発していくことよりむしろ、地元の技術、産業、文化を土台にして、地域住民が中心となり、自然の保全や美しい街並みをつくることを目的としながら、安心して暮らせる地域を再生していくこと」と定義した。

「地域再生」に求められるもの

先行研究から、地域を再生していくためには、住民が住みつづけたいと思える環境を作ることが重要であり、そのために、魅力や誇りを見つめなおすこと、地域について学び、将来的な危機感を共有すること、コミュニティを再生していくことが必要であることが考察された。また、そうした過程の中で、豊かに暮らすことを段階的に目指し、息の長い政策に取り組むことの必要性がある。さらに、コミュニティを再生していくためには、民間、行政の垣根を超え、住民同士が連携する共助が強く求められることとなる。

結論

本研究を通じて、アートは地域再生のために必要な共助や、地域学の機会、人のつながりをもたらすことを可能にすることが見えてきた。また、地域を舞台とするアートプロジェクトは、アートの鑑賞者を増加させ、アートに存在意義を与えていることが考察された。よって、地域とアートは、相乗効果をもって発展できるために、現代において組み合わされて受け入れられているのだと結論付ける。

[主要参考文献]
註１）熊倉純子監、菊池拓児・長津結一郎編『アートプロジェクト 芸術と共創する社会』水曜社、2014、p.9
註２）中藤康俊著『過疎地域再生の戦略』大学教育出版、2016、p.244
参考１)北川フラム/奥能登国際芸術祭実行委員会監修『奥能登国際芸術祭2017』現代企画室、2018年

地方における演劇の役割と効果

富山県を事例に

岡本夏野
芸術文化キュレーションコース
アートマネジメント

研究の目的と背景

現在、演劇の種類は多様化し、東宝や松竹のような興行会社が都心の大劇場で公演を行うものを中心としながらも、事務所やテレビ局がプロデュースする公演が増えている。また近年は、漫画やアニメを原作とした2.5次元ミュージカルが世界的に注目されるなど様々な展開が見られる。演劇や舞踊、演芸など生の舞台芸術や音楽コンサートは国内で年間約10万件行われており、その5割強が演劇公演である。しかしながら、その上演のうち3割強が東京に集中し、その他も多くが都市部で上演されていることがわかっている。また社団法人日本劇団協議会に加盟している劇団は正確に確認できるものの、無数に存在する演劇団体の実態を把握することは困難であり、演劇に関する統計は不正確であると言える。劇団数についても予想の範疇を超えず、首都圏だけでも2000団体とも3000団体とも言われる。

都市部で大きな展開がなされている演劇市場の中で、地方で芝居を行うことや、地方で演劇を観るための取り組みを進めることは貴重であると考えられる。富山県の演芸・演劇・舞踊鑑賞行動者率は少ないものの、ポピュラー音楽・歌謡曲鑑賞行動者率は2011年の統計で13.1％の全国9位と多いことがわかっている。なぜ演劇が観られていないのか疑問に思うと同時に、音楽鑑賞を行う人が多ければ、観劇人口の増加の可能性も期待できるのではないかと考えた。そこから、現在富山県内では、演劇に関する取り組みがどのように行われており、どのような課題と可能性があるのか、また都市部ではなく、地方で演劇公演を行う意義とは何かを明らかにしたいと考えた。そこで、本研究では、「地方における演劇の役割と効果―富山県を事例に」と題し、現在の富山県内での演劇の取り組みから、地方で演劇が果たす役割や地域に与える効果について考察した。

結論

第一章では、演劇の役割や効果について、演劇自体が「生身のエネルギーを感じる」「人間を見つめなおす」「表現する」ための役割を果たしているという点と、地方において演劇が「地域らしさの発見」「地域の人との目的共有」「地域活性化」のような効果を生み出している点を先行研究から確認した。

それらの研究を踏まえ、第二章では筆者自身が所属する高岡演劇鑑賞会を取り上げた。演劇鑑賞会とは会員たちの手で運営を行い、定期的に観劇の機会を共有する会員制の組織である。ここから「コミュニティ形成」「自主性を育む」「顔の見える関係をつくる」という役割がみえた。さらに、第三章では県内の公共ホールの中から、高岡文化ホール、富山県民小劇場ORBIS、オーバード・ホールの3館を取り上げ、これらの取り組みから「コミュニケーションの機会」「まちを巻き込む」「好奇心を刺激する」「様々な立場の人を受け入れる」役割を果たしていることが推測できた。また第四章では、利賀芸術公園で開催されたシアター・オリンピックス2019の取り組みを取り上げたが、ここから「地域の価値を発見する」「海外との繋がりをつくる」「創作の場になる」「土地への愛着心を育む」効果があることが見えた。

第二章から第四章で取り上げた5つの取り組みを「地域に密着し、自分たちで運営を行い、自分たちで観る演劇」、「公共ホールを軸としてまちや人を巻き込む演劇」、「地域に新たな価値を創り出した、他の土地では観られない専門的な演劇」と言い換えてみると、これらだけでも県内には多様で興味深い演劇の要素があるとわかる。県内の事例からみる演劇の役割と効果には「人との繋がり」や「地域の価値の発見」、「経済効果」など、一般的に衰退しているといわれる地方において、欠かせない要素が多数含まれていることがわかる。これらの事柄から、演劇は地方にこそ必要なものであると考える。また、先行研究で述べられていたことが県内の事例にも当てはまることも確認できた。

課題と可能性

県内の取り組みの課題として、「各取り組み間の繋がりのなさ」「人手不足」「広報の仕方」「教育」が挙げられる。人手が不足する中で横の繋がりをどのように効率的に活用していくか、また演劇の魅力を県民に知ってもらい、継続させていくためにはどのような広報や活動が必要なのか検討が必要である。

さらに今後の可能性としては、「演劇のまち」としての演劇祭の開催や演劇の「教育」への活用、「ホールの手伝い組織の確立」、「文化の東京一極集中への歯止め」などが考えられる。富山県が地方で作品づくりを行いたいという団体や個人を受け入れる体制を整えることができれば、文化の発信地として機能する可能性がある。県は「ものづくり」をPRすることに力を入れているが、「ものづくり」は何も工業や工芸だけに言えることではない。県が予算を出し、演劇に目を向けているのであれば、教育に演劇を取り入れることや地域の活性化に演劇を取り入れることなど、県内にある演劇資源をうまく活用することが望まれる。富山県にとって演劇が都市部に負けないほど魅力的な特徴の1つとなることに期待する。

［主要参考文献］

1）米屋尚子著『【改訂新版】演劇は仕事になるのか？演劇の経済的側面とその未来』アルファベータブックス、2016年
2）伊藤裕夫、松井憲太郎、小林真理著『公共劇場の10年：舞台芸術・演劇の公共性の現在と未来』美術出版、2010年

生きのびる地方美術館とは
駒ケ根高原美術館の閉館をめぐって

片桐縁
芸術文化キュレーションコース
アートマネジメント

はじめに

筆者の出身地、長野県駒ヶ根市にある駒ケ根高原美術館（図1）が2017年に閉館し、取り壊された。現在は更地となっている。同美術館は、市内に本社を持つ建設会社のグループ会社が運営母体となり、2011年以降は公益財団法人として運営されていた。本論文では、当時の職員をはじめとする美術館の関係者へのヒアリング調査、市民アンケート調査を行い、同美術館が閉館した原因や背景について考察した。そこから、地方にある美術館が生きのびるためには、今後どのようなことが必要となるのかについて、明らかにすることを目的とした。

地方美術館、企業美術館について

美術館運営における今後の課題には、少子高齢化の進展や人口減少、観光旅行の多様化などがある。今後、「地域密着」という観点から、その地域ならではの特色を生かしたコンテンツを形成し、地域住民のリピーターを獲得していく取り組みが必要不可欠である。地方にある美術館の役割として、「一般公衆のために『開かれた』美術館として地域社会に貢献する（1）」ことがある。

企業美術館の設立目的として、「企業メセナ」という言葉がある。これは、1990年代に即効的な販売促進・広告宣伝効果ではなく、社会貢献の一環として行う芸術文化支援という意味で広まるようになった。1990年代以降の日本企業は、行政に先んじて様々な手法で若手芸術家の支援に取り組んできた（2）。文化活動や文化支援のために、文化財団を設立している企業も多い。助成活動を中心とした財団や地域文化振興を推進するもの、学術的な活動で高い成果をあげている財団も存在する。

駒ケ根高原美術館について

駒ケ根高原美術館は1993年に、「駒ヶ根に文化の中心をつくる」という目的で設立された。「今、生きている人が今伝えたいことを発表する場」を目指し、現代作家を中心に収蔵していた。池田満寿夫、藤原新也、瀬戸剛の常設展示室が、それぞれの作家と話し合って設けられた。収蔵作品の多くは、「戦争と平和」、「生と死」をテーマとしており、同館のコンセプトの一つである“いのち”に関係する作品展示が行われた。初代館長を松井君子が務め、「生きる美術館」を目指し、様々な展示やワークショップ、地域の小中学生向けの鑑賞授業などが行われた。

閉館の原因、背景

単に同美術館への来館者の減少だけではなく、情熱ある人物の消失、土地の問題や施設のバリアフリー問題、企業や市が何に力を入れているのかなど、複数の要因が考えられる。また、市民アンケート調査からは、同館への認知度は約9割と高いが、その中で来館したことがある人は約5割であった。また、同美術館が市民にとって身近ではないことも見えてきた。一部の市民にとっては、美術館の存在は大きかったが、地元の美術館が、「あってもなくても変わらない、なくても特になんとも思わない」という意見も見られた。

おわりに

地方にある美術館が生きのびるためには、地域の人々が身近に感じられ、美術館が新しい出会いのきっかけ、その場に訪れると新たな感情や考え、思いが芽生えるようになっていくことが不可欠である。地域によって、抱えている財政状況や歴史的文化財、地域の特性、遺産、文化に対する意識や関心度は異なる。そこから地域にあう方法と、地域の人々に対してのアクションの仕方を探ることが重要である。美術館に対する市民と市の根底にある思いや意識を変え、地域に対する思い、地域の芸術に対する思いを養い、教育し、後の世代にも伝えていくことが必要である。そうすることで、地域の人々から愛され、地域の中で生きのびることができる美術館になっていくと考える。

図1 駒ケ根高原美術館から見える景色（長野県駒ケ根市）、個人提供

［引用文献］
（1）横山勝彦、半田滋男著『アートの裏側を知るキーワード』美術出版社、2018年、39頁
（2）小林真理・片山泰輔監修『アーツ・マネジメント概論　三訂版』水曜社、2009年
［主要参考文献］
（1）駒ケ根高原美術館パンフレット、2016年
（2）松井君子著「一であい、いのち、ふたたび―生きている美術館をめざして」『伊那路』第448号、上伊那郷土研究会、1994年
（3）松井君子著『美術館はおもしろい』駒ケ根高原美術館、2010年